

令和 4 年 6 月 13 日現在

機関番号：15301

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2021

課題番号：18K12290

研究課題名(和文) 大伴家持における表現法の研究

研究課題名(英文) Study of expression method in Otomo-no-Yakamochi

研究代表者

松田 聡 (MATSUDA, Satoshi)

岡山大学・教育学域・教授

研究者番号：60806412

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、万葉集末四巻(巻17～20)を対象とし、主に「散文」的な性格を持つ題詞・左注や、歌の配列に着目することによって、その日記文学的側面を考察したものである。学会における研究発表(5件)を行ったほか、共著1冊、論文3篇を公刊した。これらの研究では、末四巻と同じく年月日順配列を原則とする万葉集巻六や、後世の日記文学作品である更級日記といった別途の資料にも目を向けることで、万葉集末尾四巻における家持の日記的な表現手法について多角的に考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

万葉集の巻17～20が日記文学的側面を持つことは従来も指摘されてきたが、本研究では、題詞・左注を含めた歌集の配列に着目することで、その日記文学的な性格をより明確にすることを目指した。特に巻20の防人歌を含む一連の部分について、一見防人と無関係な家持歌が混在していることは従来十分に説明のつかないことであったが、家持の動向を軸とする日記的な文脈を析出することにより、その文脈の上に防人歌による類聚という枠組みがゆるやかに重ねられているということが明らかになった。万葉集における散文的要素に着目し、土左日記以前における日記文学的方法の一端を解明したという点に本研究の意義があると思われる。

研究成果の概要(英文)：This study focuses on the last four volumes of the Man'yōshū (Volumes 17 to 20), and considers the diary literary aspects by focusing mainly on the titles and notes attached to the left side that have a "prose" character and the arrangement of poetry. I made five presentations at academic conferences and published one co-authored book and three papers. In these studies, by looking at other materials such as Man'yōshū Vol.6, which is based on the order of date, and Sarashina diary, I considered Yakamochi's diary-like expression method in the last four volumes of the Manyōshū from various angles.

研究分野：日本上代文学

キーワード：万葉集 末四巻 日記文学 散文 大伴家持 防人歌

1. 研究開始当初の背景

従来の万葉集研究は、『万葉集』から作者ごとに作品を抜き出して、それについて論じるという方法が主流であったが、近年、それでは『万葉集』という「歌集」を読んだことにはならないのではないかという主張がなされるようになってきた。端的に言って、『万葉集』は歌を並べることで何を語ろうとしているのか、ということが問われるようになってきたのである。このようなパラダイムシフトは概ね2000年前後を境に急速に生じてきたのであるが、結果として、作品から読み取れることを安易に歴史的事実に結びつけることへの批判が生じ、ややもすれば、戦後の万葉研究の大きな部分が否定されかねないような状況が出来したのである。

このような変化の中であって、私は大伴家持の作品を一つずつ取り出して考えるだけではなく、『万葉集』の中で理解するよう努めてきた。対象は主に『万葉集』の末四巻(巻十七～巻二十)であるが、それはこの四巻が「家持歌日記」の様相を呈しているからである。但し、末四巻が「家持歌日記(歌日誌)」などと通称されてきたのは、これらの巻がそれ以前の巻と違って部立(分類)を持たず、家持の作を中心とする歌々を原則として日付順に配列しているからであって、「歌日記」などという呼び名はあくまで便宜的なものに過ぎない。私も、「家持歌日記」という別個の作品が先に成立し、後に『万葉集』の末尾に組み込まれたなどと考えているわけではない。『万葉集』の一部として編まれている末四巻が、日記文学的な性格を持っていることをどう考えるのか、というのが私の問題意識である。

上記のような視点から、私は万葉集末四巻に載録されている家持の歌を中心に、その表現を分析することで、以下のことを考究してきた。

万葉集末四巻には何か一貫した編纂原理のようなものはあるのか。

家持の表現(歌・題詞・左注)は、先行する巻の何をどのように継承し、それをいかにして末四巻に展開しているのか。

家持歌日記とも目される日記文学的な歌巻が『万葉集』の末尾に据えられていることをどう捉えるか。

これらの問題を、多角的に検証し、万葉集末四巻の持つ日記文学的な性格とその意義を明らかにしたのが、2017年10月に上梓した拙著『家持歌日記の研究』(塙書房刊)である。従来通称に過ぎなかった「歌日記」という呼称を超えて、平安朝の日記文学にも通底する万葉集末四巻の歌集としての性格を、本書においては積極的に論じた。

しかしながら、上記の著書でその歌集としての性格を全て明らかにできたわけでもない。言うまでもなく、平安朝の日記文学は散文の中に和歌が点在するという体裁を基本としているが、末四巻にも漢文ではあるが、題詞・左注など散文としての性格を持つものがある。また、先行する巻の中でも、例えば巻五や巻六のように、日付を活かして何かを語ろうとする歌巻もあり、その「歌日記」との類似性は当然問題となるはずであるが、この点についても十分に研究されているとは言いがたい状況にある。本研究は、このような背景のもと、万葉集末四巻の「散文」的な性格を明らかにしようとしたものである。

2. 研究の目的

本研究は、万葉集における大伴家持の表現法について、「散文」という視点から捉え直し、万葉集を改めて日本文学史上に位置づけようとするものである。

万葉集の末四巻(巻17～巻20)は「家持歌日記(歌日誌)」などと呼ばれてきたが、それは、この四巻が家持の歌を中心に概ね日付順に歌が配列されているという外見上の特徴による便宜的な呼称に過ぎなかった。本研究は、これら四巻を積極的に「日記文学」的な歌巻と捉え、その特質を細部にわたって調査・研究することにより、平安朝における日記文学作品の源流として位置づけることを試みる。従来も万葉集と平安朝文学との関係性については部分的に指摘されてきたが、本研究は万葉集を積極的に日記文学的視点から捉えることによって、日本古代文学研究に新たな方法論を提示しようとするものである。

3. 研究の方法

家持歌日記の様相を呈する万葉集末四巻(巻十七～二十)を、本当に「歌日記」として捉えようかどうかという問題は、実は家持以外の作者の歌をどう捉えるかという問題と直結している。とりわけ、家持歌以外の作を多量に含む巻二十などは、「歌日記」の範疇に入れるべきではないという議論も根強くあるのが現状である。

かつて私は、巻二十の中でも相当の分量を持つ「防人歌」について、それが巻二十にいかんして採録されているかという問題について論じたが、本研究においては、その続編として、防人歌と混在する形で配列されている家持の歌々について再考を試みた。ちなみに、従来問題とされてきたのは以下のような点である。

防人歌と混在する家持歌には、一見防人と無関係と思われるような歌が混じっているが、これをどう考えるか。

そして、その防人と無関係に見える歌には、天皇の行幸を前提とするような歌が含まれているが、史実としては天皇の行幸などはありえない時期に当たっている。これをどう考えるか。

本研究では、これらのことを個々の歌だけで論じるのではなく、前後の配列の中で捉えることで、全体がある種の「歴史」を語っていることを明らかにした。本研究における「散文」とは、歌・題詞・左注を前後の歌との関連において配列することで、そこにストーリーを読ませようとするような手法を指す。このような新しい読解の方法を提示しようというのが本研究の意図したところである。

なお、研究の進展につれて、末四巻と巻六との類似ということも研究の俎上に載せることとなった。具体的には、天平五年、天平十六年という年次への関心の持ち方を軸として、歌で歴史を語るといふ側面について、巻六の歌についても検討を進めることとした。

4. 研究成果

〔著書〕

- 『更級日記 上洛の記千年 東国からの視座 』（共著）
和田律子・福家俊幸編、武蔵野書院、2020年7月、428p）
担当論文：『万葉集』と東国 『更級日記』を視野に 」（pp267-294）

〔学術論文〕

- 「授刀寮散禁の歌 万葉集巻六の論として 」（『万葉集研究』第39集、塙書房、2019年11月）
「万葉集巻六と天平十六年 末四巻を視野に 」（『岡山大学国語研究』34号2020年3月）
「防人歌蒐集時の家持独詠歌再考 万葉集巻二十における散文的表現 」（『国文学研究』第192集、2020年11月、早稲田大学国文学会）

〔学会発表〕

- 「万葉集巻六と家持歌日記」（美夫君志会万葉ゼミナール、2018年9月8日）
「坂上郎女の月の歌 万葉集巻六の「天平五年」 」（岡山大学国語研究会、2018年11月10日）
「授刀寮散禁の歌 反歌を中心に 」（岡山大学教育学部国語研究会、2019年11月9日）
「万葉集巻二十における散文的表現 防人歌蒐集時の家持独詠歌をめぐって 」（早稲田大学国文学会秋季大会、2019年11月30日）
「末四巻の日記性 散文的表現をめぐって 」（美夫君志会12月例会、2019年12月8日）

本研究は万葉集末四巻（巻17～20）の日記文学的側面を考究しようとするものであり、その解明の糸口として「散文」的な性格を持つ題詞・左注や歌の配列に着目しつつ研究を進めてきた。

平成30年度はまず「万葉集巻六と家持歌日記」ということについて考究し、口頭発表を行った（学会発表）。巻六には末四巻と共通する要素が数多く指摘できるが、それは天皇讚美に関わるような晴れの歌だけではなく、官人達の私的な歌にまで及んでいる。端的に言って、それらの歌は末四巻と共通の基盤に立つ和歌観によって選択されたものと見てよい。末四巻（特に巻十九巻末部から巻二十にかけて）には家持の目を通して見た「歴史」が語られるという側面が見受けられるが、巻六の場合も、官人（おそらくは家持）の目を通した「歴史」が語られているのではないだろうか。私的な抒情を詠む歌々も、聖武朝の文化や時代思潮と深く関わっており、その意味において「歴史」と無縁ではない。巻六は、そのような文化史的な側面をも含み込みつつ、官人の視点から「聖武朝」のありようを語っているのだと考える。これは末四巻が「家持の見た歴史」を語っているのとパラレルな関係にあると言える。

次に、巻六の問題との関連で「坂上郎女の月の歌 万葉集巻六の「天平五年」 」というテーマで研究発表を行った（学会発表）。時間軸に従って配列された天平五年の歌が、家持に関連する事柄に収斂していく様を見極めようとしたものであるが、これも末四巻における日記的手法と同質のものを見いだすべく扱ったものである。

令和元年度は、前年度に引き続いて巻六の歌を取り上げ、「授刀寮散禁の歌 反歌を中心に」と題して発表を行った（学会発表）。これについては「授刀寮散禁の歌 万葉集巻六の論として」という題目で論文化した（学術論文）。巻六の当該歌は、「交友」という中国思想に関わる点で、家持との関連が問題となるものである。また、前年度に発表した内容の一部を「万葉集巻六と天平十六年 末四巻を視野に」（学術論文）と題して論文化した。

次に、本研究の中核をなす、巻二十の問題について研究を進め、防人歌と家持歌が混在する形で配列されていることについて、私見を提示した（学会発表）。家持の動向を軸とする日記的な文脈を析出することにより、その文脈の上に防人歌による類聚という枠組みがゆるやかに重ねられているということを示したものであるが、これについては、「防人歌蒐集時の家持独詠歌再考 万葉集巻二十における散文的表現」と題して論文化した（学術論文）。

また、末四巻全体の日記文学的性格を俯瞰するための研究も行った（学会発表）。本研究の根幹に関わる内容を含んでいるので、発表の要点を箇条書きの形で掲げておく。

1. 末四巻の題詞・左注には、作歌の当事者でなければ知り得ないような内容のものがしばしば見受けられるが、そのような記載が末四巻の全般にわたって存在することは、末四巻全体が最終的には日記文学的な歌巻として編まれていることをうかがわせるものではないだろうか。
2. 右のような題詞・左注には、動作主体が記されていないものも少なからず指摘できるが、そのような歌稿に「大伴宿禰家持作」といった類の「左注」を付け、自らの動静を語る文脈に取り込むことができるのは原則的には家持本人しか考えられない（独詠歌は特にそうであろう）。このようなことからすれば、末四巻全体を最終的に整えた主体（編纂責任者）はやはり家持と見るべきではないか。
3. 末四巻においては題詞・歌・左注などが相まって「散文的」な文脈が生じている場合があると思われる。「伝聞歌」の採録に関わる注記なども、基本的には家持の動静を語る「地の文」として理解すべきではないか。

なお、令和2年度は新型コロナウイルスの感染拡大により、学会がほぼ全て中止になってしまった関係で、予定していた研究発表ができなかったが、「東国」との関係という観点から『更級日記』と『万葉集』とを比較して論じるという機会があり、別の角度から末四巻の散文的性格について考察することができた（著書）。特に、家持が越中という「鄙」の「景」に目を向ける「プロセス」が『万葉集』（巻17）に描かれているというのは、『更級日記』との比較において明らかになったことであり、本研究の視点からも特筆される。巻十七の歌の配列の中からそれが浮かび上がってくるように編まれているという点、末四巻の配列や題詞等の記載が「散文」的性格を示す一例と言えるだろう。

以上、当初の予定とはやや異なる部分もあるが、『万葉集』末四巻の日記文学的性格について、新たな知見を提示することができた。万葉集における散文的要素に着目し、土左日記以前における日記文学的方法の一端を解明したという点に本研究の意義があると思われる。

〔付記〕

なお、令和3年度については、科研の前年度応募に採択されたために次の研究に移行しており、本研究と重なる部分については次の課題（21K02173）において研究を継続している。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 松田 聡	4. 巻 192
2. 論文標題 防人歌蒐集時の家持独詠歌再考 万葉集巻二十における散文的表現	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 国文学研究	6. 最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松田聡	4. 巻 39
2. 論文標題 授刀寮散禁の歌 万葉集巻六の論として	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 万葉集研究	6. 最初と最後の頁 299-343
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松田聡	4. 巻 34
2. 論文標題 万葉集巻六と天平十六年 末四巻を視野に	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 岡山大学国語研究	6. 最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 松田聡
2. 発表標題 授刀寮散禁の歌 反歌を中心に
3. 学会等名 岡山大学教育学部国語研究会大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 松田聡
2. 発表標題 万葉集巻二十における散文的表現 防人歌蒐集時の家持独詠歌をめぐって
3. 学会等名 早稲田大学国文学会秋季大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 松田聡
2. 発表標題 末四巻の日記性 散文的表現をめぐって
3. 学会等名 美夫君志会12月例会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 松田 聡
2. 発表標題 万葉集巻六と家持歌日記
3. 学会等名 美夫君志会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 松田 聡
2. 発表標題 坂上郎女の月の歌 - 万葉集巻六の「天平五年」 -
3. 学会等名 岡山大学教育学部国語研究会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 和田律子 福家俊幸 編	4. 発行年 2020年
2. 出版社 武蔵野書院	5. 総ページ数 428
3. 書名 更級日記 上洛の記千年 東国からの視座 (松田担当論文「『万葉集』と東国 『更級日記』を視野に」)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------